

[新刊紹介] カエデの本, 植物文化人物事典, 外来生物事典, 花と植物 おもしろ雑学王, ため池観察ガイド, 改訂増補帰化植物便覧, 九州の花・実図譜, 国際植物命名規約(ウィーン規約)2006 日本語版

著者	鳴橋 直弘, 佐藤 杏子, 清水 建美
著者別表示	Naruhashi Naohiro, Sato Kyoko, Shimizu Tatemi
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	55
号	2
ページ	110-112
発行年	2007-12-30
URL	http://doi.org/10.24517/00053372



新刊紹介

- 矢野正善：カエデの本 A4判, 399頁, 2003年4月, 日本葺刊行会, 6,800円。

本書は、日本産のカエデ属の野生種と園芸品種を 700 枚のカラー写真で紹介した本である。

主要部は 3 部からなり、i) 日本野生のカエデ (カエデの学名, 日本のカエデ分布表, 日本の野生カエデ各種, カエデを栽培して感じたこと), ii) カエデの園芸品種 (園芸品種の説明, カエデの園芸品種各種 1, 秋のカエデ写真, カエデの園芸品種各種 2) および iii) 参考資料, その他 索引 (カエデに関する資料, 私流 月ごとの育成作業, カエデの園芸品種各種 3, 日本全国の紅葉名所) である。終わりに、園芸品種さくいと日本の野生カエデさくいんがある。本書の著者は矢野正善氏であるが、文献は中嶋久夫氏、英訳は横井政人氏と谷 栄一郎氏が担当している。

カエデに関する文献, 月ごとの栽培の作業, および全国のカエデの名所は、カエデに興味ある者には役に立つ。見事なカラー写真とそれを説明する日本語と英文があり、本書は外国人に好まれる編集となっている。

著者は日本写真家協会の会員だそうで、それぞれの写真はアマチュアでは表現できない情感豊かなモミジの世界を見せてくれる。カエデの葉は春の芽出しから葉に成長する間、それぞれの木によって葉の色が異なる。その時の色は多彩で変化に富み一番美しい。しかし、同一品種でも日本列島の東と西で、葉の色が少し異なることがあるという。著者の長年の栽培と観察結果から出たもので、含蓄のある言葉である。新刊ではないが、筆者が最近購入し、見ていて非常に楽しい本なので、ここで紹介したい。

購入希望者は、著者の矢野正善氏 (〒633-2223 奈良県宇陀市菟田野区宇賀志 1935 Tel. 0745-84-4760 E-mail ganshuku@apricot.ocn.ne.jp) に問い合わせると著者割引で購入できる。 (鳴橋直弘)

- 大場秀章 (編)：植物文化人物事典 A5判, 632頁, 2006年4月25日, 日外アソシエーツ, 7,600円。

本書は、江戸時代から現代まで、日本の植物に関係した物故者 1,157 人の事典である。植物学や農学、園芸学などの学問分野の専門家に限ることなく、篤志家、詩人や歌人、画家、政治家など、多少なりとも植物文化に関わりのあった人々を網羅していると編者はいう。

本編には、人名見出し、読み方、生年・没年の月日、職業、肩書、本名・別名・異表記など、出生地、家族・親族、学歴、師弟、学位、専攻、所属団体、受賞歴、経歴などが記載され、文献もついている。巻末に人名索引と事項名索引がある。

人により、詳しく書かれたものと情報がとれなかったのか、記述の短いものが見られる。このような事典では仕方のないことかもしれない。木村有香の項で、『旧制七高から京都帝国大学理学部への進学を考えたが、同大植物学教室の小泉源一に相談したところ、“標本も図書もないから”と東京帝国大学理学部への進学を勧められ、同大で早田文蔵の指導を受けた』とある。こういうエピソードは個人的には面白い。チュンベルグ、ビュルガー、マキシモヴィチ、グレイ、シーボルト、などの外国人分類学者やライト、デーダーライン、ワールブルグのような採集家もこの事典に出ている。名前だけしか知らなかった人の略歴や業績を知るとはうれしいことである。 (鳴橋直弘)

- DECO (編) 池田清彦 (監修)：外来生物事典 A5判, 463頁, 2006年9月7日, 東京書籍, 2,800円。

本書は、「特定外来生物」と「要注意外来生物」をすべて収録し解説した事典である。

本は、はじめに、「外来生物法」と本書の編集方針、本書の見方、アイコンの説明、があり、第 1 部 特定外来生物 (第 1 次)、第 2 部 特定外来生物 (第 2 次)、第 3 部 要注意外来生物、の本書の本体があり、最後に第 4 部 資料・索引がある。また、5 つのコラムが途中に入っている。本体は、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類、クモ・サソリ類、植物の順で、個別の生物につき、和名、目と科名、学名、環境省の指定理由、その他の特徴があり、原産地、形態と生態、移入の歴史と現状、外来生物法、IKEDA's view (その生物が指定されたことに対する監修者である池田清彦氏のコメント) が書かれている。ほとんどの生物に、世界か日本かの分布図が付いている。特定外来生物として、動物 71 種、植物 9 種、要注意外来生物として、動物 66 種、植物 84 種が登場している。

ある人々は増殖を望み、ある人々は死滅を望むブルーギルと同様な問題が植物でも起こっている。ナルトサワギクはアサギマダラが訪花昆虫であるので、蝶の収集家は挙ってこの植物を植栽していると聞いている。ナルトサワギクは肝障害を引き起こすピロリジンアルカロイドを含有するので、オーストラリアでは有害雑草として抜き取りや除草剤の散布などが行われている (p.182)。外来生物が入って来たとき、大なり小なりその生態系を変化させることは事実であろう。この事実を拒絶するか容認するかは意見の分かれるところである。

本事典の第4部に外来生物法の全文や外来生物法以外の主な法規制が掲載され、参考文献やサイト一覧があり、昨年度の出版ではあるが、読者に有益な出版物と考え、敢えて紹介したい。(鳴橋直弘)

○ 博学こだわり倶楽部(編)：花と植物 おもしろ雑学王 A6判, 222頁, 2007年5月1日, 河出書房新社, 514円。

本書は、分類、形態、生理、生態、栽培、進化、利用など植物に関して疑問に思うことについて解答した本である。

1. 雄しべが、雌しべより高い位置にあるのにはワケがある。2. 木のような、草のような「竹」。いったいどっちの仲間。3. 植物は、その進化の過程で偶然「緑色」になったってホント。4. 「ヒマワリの花は太陽を追って動く」は、じつは真っ赤なウソ。5. 植物にも、人間のように“ABO型”の血液型があるって。6. 海水の中でも生きられるマングローブの◎パワーとは。7. 動けない植物は「近親結婚」をどうやって避けている? の7つの項目の下に、それぞれ個々の話題で書かれている。本書には目次や索引はない。

この本は、夢の設計社の「博学こだわり倶楽部」が多くの植物学の本を読んで、書き上げた本であると筆者は想像している。残念ながら、適切な植物学上の用語の使用がなされていない箇所が見うけられる。イチゴのツブツブは、“種”ではなく“実”だった。キクの花びらは1枚であるとあるが、花弁なのか花冠なのか。また、タケのところ、風の力を借りて受粉して種子をつくり、その種子も風の力によって散布される、とある。ツバキが冬に開花するのはメジロが花粉を運ぶからだという。これなどは説明が不足しており、なぜ冬に咲くのかの解答になっていないように思える。

植物の名前で一番短いのは? 普通なら、い草の“イ”と答えるところであるが、解答は“イ”, “キ”, “チ”と3種あることが書かれている。さらに、木材腐食菌、ガソリンツリー、生節と死節など筆者の知らない言葉もある。アサガオの開花をコントロールする方法やキョウチクトウの毒性についての興味ある記述もある。本書の話題は、植物学の多方面の分野に渡っているのだから、読者にはなんらかのところで教えられる部分があるかもしれない。また、説明や解釈の上での間違いも見つかるかもしれない。文庫版なので、旅行など、外出時にちょっとした読み物として手頃な本である。(鳴橋直弘)

○ 大沼淳一・土山ふみ(編)：ため池観察ガイド A5判, カラー8頁・モノクロ159頁, 2007年9月14日, 中日出版社, 1,500円。

本書は、ため池をフィールドとした野外体験型環境学習プログラム開発に携わった「ため池の自然研究会」の会員有志らによって企画・製作された、ため池調査ガイドブックである。ため池をさまざまな側面から調査し、調査する者自身がため池に学んでいくことを意図して、第1章 ため池の役割とその歴史を調べる、第2章 ため池の水環境を調べる、第3章 ため池の生き物(植物・動物)を調べる、第4章 ため池を守るために、付録・参考資料、から構成されている。

実際にため池を調査する際の道具・手順が詳細に示してあり、身近なため池の自然を教材としたい多くの方々にとっては、具体的なマニュアルとして大いに活用できそうだ。さらに、ため池のプランクトンを携帯電話のカメラで撮影するというユニークな試みなども紹介されており、手軽にため池の自然に親しむヒントが満載である。

ため池は、日本全国におよそ20万ヵ所を数えるという。私たちの身近にあるため池を訪れてみれば、「ため池は、そのまんまで水辺の自然博物館である」という著者らの言葉どおり、そこに息づく生命のありのままのすがたを通して、自然の豊かさやたくましさを学ぶことができるだろう。(佐藤杏子)

○ 太刀掛 優・中村慎吾(編)：改訂増補 帰化植物便覧 A4判, 676頁, 2007年10月1日, 比婆科学教育振興会, 6,300円。

本書は、日本各地で帰化植物として報告された植物を文献からまとめたものである。太刀掛 優著1989年出版の『帰化植物便覧』の改訂増補版である。

はじめに、もくじ、帰化植物とは何か(pp. 1-14)、日本の帰化植物(pp. 15-589)、コラム 帰化植物と外来植物(p. 26)、学名索引(pp. 591-628)、和名索引(pp. 629-676)からなる。本編は、裸子植物、被子植物、シダ植物、コケ植物の順で、科毎に植物が記載されている。帰化植物は、学名、和名(別名)があり、文献と原産地、渡来年代、帰化の実態について記されている。

本の7頁に、帰化植物の定義として3つの条件を挙げている。1) 人間がよそから持ち込んだ植物であるこ

と、2) 野生の状態で見つかること、3) 外来植物であること。しかし、国内で野生として認められている植物でも他の地域で新しく発見された“国内帰化植物”が載っているし、野生植物の栽培からの逸出も掲載されている。

帰化植物の情報は、各都道府県あるいは市町村別に著された植物誌・植物目録等から集め、また、雑誌として、植物研究雑誌、植物分類、地理、植物地理・分類研究をはじめ多くの同好会誌やニュースレターからも拾い出したという。集められた情報は膨大である。それらをまとめたものが本書である。帰化植物に関心のある者には手許に置きたい 1 冊である。購入希望者は、比婆科学教育振興会（〒727-0013 広島県庄原市西本町 1 丁目 7-7 中村慎吾方 Tel., Fax. 0824-72-3234）に問い合わせるとよい。（鳴橋直弘）

○ 益村 聖：原色 九州の花・実図譜Ⅲ B5 判変形，126 頁，2007 年 10 月 10 日，海鳥社，4,200 円＋税。

このほど、植物地理・分類学会会員の益村 聖さんが、九州で見られる代表的な植物の図譜を出版された。本書は「原色 九州の花・実図譜Ⅰ」（2003 年）「同Ⅱ」（2005 年）に続くもので、157 種、8 変種、3 品種、合計 168 種類の植物が原図で描かれ、簡潔な説明が付けられている。

同氏は、「絵合せ九州の花図鑑」（1995 年）を出版されているが、葉形の特徴だけで分類できるように特徴を捉えた線画で描かれている。本書のカラー図譜もそれぞれの植物の雰囲気がよく捉えられ、見ているだけでも楽しめるものである。（清水建美）

○ 大橋広好・永益英敏（編）日本植物分類学会国際植物命名規約邦訳委員会（訳）：国際植物命名規約（ウイーン規約）2006 日本語版 B5 判，208 頁，2007 年 11 月 25 日，日本植物分類学会，2,500 円。

本書は、第 17 回国際植物学会議（オーストリア，ウイーン，2005 年 7 月）で採択された国際植物命名規約を日本語に翻訳した本である。

本は、序文、本規約中の重要な日付、前文、第Ⅰ部～第Ⅲ部、付則Ⅰ，付則Ⅶ，学名索引、事項索引（国際植物命名規約邦訳委員会）、植物命名法用語集（国際植物命名規約邦訳委員会）、日本語版あとがき（大橋広好・永益英敏）からなる。

今回のウイーン規約は、全体としては構成も配列も基本的にセントルイス規約と異なるところがなく序文に書かれている。もちろん、今回の規約には、以前にないいくつかの追加と修正が加えられている。新規規約の第 37 条第 4 項に、新種または新種内分類群（化石を除く）の学名のタイプは、2007 年 1 月 1 日より前ならば 1 つの図解であってもよい。2007 年 1 月 1 日以後は、タイプは標本でなければならない、とある。このことからタイプ標本のない高等植物の図解のみの新種発表は禁止となった。また、2000 年のセントルイス規約では、種の形容語（エピセツト）において、人名、地方語名、または以前は属名であった場合は著者が大文字で書き始めたいならばそうしてもよいとあったが、今回は種および種内分類群のすべての形容語は小文字で書き始められるべきである、と勧告されている。さらに、第 12 条に、正式に発表されたものだけが学名であるとされる。だから、早田先生が標本に“学名”を書かれ、その後小泉先生がその“学名”を正式に発表された、という文章は、早田先生が標本に“名称”を与えられ、その後その“名称”を小泉先生が発表し“学名”となった、となる。

翻訳委員会による事項索引と植物命名法用語集は、読者には有益である。筆者が前から気になっていたことが、ここに書かれていた。それは、botanic garden と botanical garden の違いである（p. 197 の〔hort. bot.〕の項）。

分類学を学ぶ者はさておき、編者の「あとがき」に書かれているように、本書は、植物を研究材料とする科学者や学生、さらには生物の研究者や教師、科学ジャーナリストなどに役立つ本である。（鳴橋直弘）